

要求場面におけるストラテジーの適切度評価
—依頼、改善要求の比較—An evaluation in selecting an appropriate communication strategy for requests:
Comparisons between requests and demands for amendment

西 優加理

要旨

本稿は、要求場面の《依頼》と《改善要求》を取り上げ、日本語母語話者、上級、中級の日本語学習者を対象にアンケート調査を行い、話者のストラテジーの適切度評価を分析した。語用論的条件の観点から適切度評価、3 グループ間の有意差について考察した結果、個々のストラテジーの適切度、学習者と母語話者の認識に差異が生じていることが明らかとなった。

キーワード：依頼、改善要求、語用論的条件、ストラテジー、適切度

1. はじめに

要求場面では要求表現の他に様々なストラテジーが用いられるが、その適切度は当該場面の発話機能によって異なる。山岡（2008：48）によると、それぞれの発話機能は様々な語用論的条件の統合¹によって発動するといひ、このことから、語用論的条件は発話機能を決めるだけでなく、ストラテジーの適切度にも影響すると言えるだろう。ストラテジーの選択はミスコミュニケーションにつながる危険性がある。これを防ぐためにも、語用論的条件と個々のストラテジーの適切度にどのような関連があるかを明らかにする必要がある。

本稿では、《依頼》と《改善要求》の個々のストラテジーの適切度評価、日本語母語話者と中級、上級学習者の評価の差異について、語用論的条件の観点から考察する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

2.1. 《依頼》と《改善要求》の語用論的条件

本稿では、要求場面として頻度の高い《依頼》と《改善要求》を取り上げる。山岡（2008：83、92）によると、《改善要求》とは「既に行われている相手から自分への与害行為を中断させようとする発話機能」であり、《依頼》と共通する語用論的条件が多い。

参与者：《依頼》・《改善要求》の話者＝参与者 A

《協力》・《改善》の話者＝参与者 B＝意図されている行為者

¹ 語用論的条件とは、一つの機能を発動するための、会話参与者間の人間関係、利害、能力、予備知識、社会通念などの語用論的要素群である。（山岡 2008：48-49）

- (1) 当該行為が参与者 B の意志によってなし得る行為である。
- (2) 通常の事態の進行において参与者 B が当該行為を実行するのは自明ではない。
- (3) 参与者 B による当該行為の実行は参与者 B 自身の権限に基づく。
- (4) 参与者 B が当該行為を実行することを参与者 A が欲している。

一方、《依頼》と《改善要求》を区別するための語用論的条件は以下の 2 つである。

《依頼》 (5) 参与者 B による当該行為の実行は参与者 A に利益をもたらす。

《改善要求》 (5) 参与者 B は現に参与者 A に不利益をもたらしている。

本稿では、これらの語用論的条件をもとにストラテジーの適切度評価を分析する。

2.2. 本研究の位置づけ

蒲谷 (2013 : 228) は、実際に何らかの行動に展開することを意図とする行動展開表現は、人間関係や場の認識に基づく配慮や形式上の工夫がより重視されるとしている。この配慮や形式上の工夫に関して、本稿では《依頼》と《改善要求》のストラテジー²を取り扱う。先行研究³では表出段階での分析が多いが、話者が適切であると判断して用いたのか、単なる誤用であるのかは分からない。ストラテジーの適切度評価は非常に個別性が高いため、これに関する先行研究は管見の限り見当たらない。しかし、語用論的条件に応じたストラテジーの適切度の変化、母語話者と学習者の評価の差異を明らかにすることは、学習者にとって、特に接触場面でのコミュニケーションに有益であると考えられる。

本稿では、個々のストラテジーについて、話者が発話として表出する以前の認識段階における適切度評価を分析し、《依頼》と《改善要求》の語用論的条件との関連を考察する。

3. 調査概要

3.1. 調査協力者

調査協力者は 2013 年 10 月に日本の大学、大学院に通う学生および研究員である。一橋大学国際教育センターの協力のもと、日本語の授業を履修する中級学習者 17 名⁴と上級学習者 29 名⁵、さらに日本語母語話者 23 名⁶の計 69 名に対して調査を行った。

² 本稿では、《依頼》と《改善要求》の発話のうち、要求の核となる発話部分を「主ストラテジー」、その他の発話部分を「補助ストラテジー」と呼ぶ。

³ 熊井 (1992a, b) 熊谷 (1995)、牧原 (2008)

⁴ 年代は 20 代～30 代。男性 7 名、女性 10 名。出身国は中国 7 名、韓国 4 名、オーストラリア 3 名、フランス、オランダ、ドイツが各 1 名である。

⁵ 年代は 10 代～20 代。男性 16 名、女性 13 名。出身国は韓国 24 名、中国 2 名、フィリピン、ブラジル、タイが各 1 名である。

⁶ 年代は 10 代～30 代。男性 12 名、女性 11 名である。

3.2. データ収集の方法

調査はアンケート形式で行った。《依頼》と《改善要求》について、記載された「背景」と「発話時の状況」を読み、話者の立場で回答するものである。調査協力者の属性を考慮し、日常的に遭遇しそうなコミュニケーション場面を設定した。また、発話の相手は社会的人間関係による変数を減らすため〈日本人の同性、同学年の親しい友人〉と統一した。

3.3. 適切度評価の方法

各場面について、主ストラテジーと補助ストラテジーを組み合わせた9つの発話⁷に対し、「よい」を5点、「よくない」を1点とし、5段階で点数評価してもらった⁸。発話におけるストラテジーの組み合わせは、① [主⁹+相手の気持ちの代弁]、② [主+代案の提示]、③ [主]、④ [要求の予告+主]、⑤ [要求度の軽減+主]、⑥ [詫び+主]、⑦ [主+交換条件の提示]、⑧ [主+追加の情報提供]、⑨ [事情の説明+主]である。

主ストラテジーの文機能はすべて《命令》系¹⁰にした。こうすることで、その表現形式に左右されずに補助ストラテジーの適切度を正確に評価できると考える。このような表現は非常に配慮の欠けた表現であるが、補助ストラテジーの追加によって発話全体の適切度が向上する可能性がある。補助ストラテジーは《依頼》と《改善要求》のどちらにも用いられ得る8つを選定した。熊谷(1995)は、《依頼》のストラテジーを「依頼の目的を効果的に達成する」と「相手への配慮を示す」ものに分類しているが、本稿ではこれを参考に、②⑦⑧⑨を「要求内容の実現」、①④⑤⑥を「相手への配慮」として分類した。

3.4. 分析方法

アンケート調査の①～⑨の発話の評価得点¹¹の統計分析¹²結果をもとに、《依頼》と《改善要求》の個々のストラテジーの適切度評価を明らかにし、語用論的条件との関連について考察する。また、個々のストラテジーについて一元配置分散分析と多重比較を行い、母語話者と上級、中級学習者のグループ間による有意差についても考察する。

7 調査文は筆者による作文であるが、複数の日本語母語話者の判断をもとにストラテジーの機能に合わせた表現形式、自然な発話順序になるようにした。資料を参考されたい。

8 その他の発話文の表現形式を考慮に入れられないようにするため、調査協力者には9つの発話文のみを比較して〈よい—よくない〉を評価することを事前に注意した。

9 主ストラテジー。

10 「Vてくれ」の簡略化した「Vて」の形を用いた。(山岡・牧原・小野 2010 : 150)

11 場面設定の一般化を図るため、《依頼》・《改善要求》ともに2種類の回答用紙を半数ずつ無作為に配布したが、回答に差は見られなかったため、2種類の回答を合わせて集計した。

12 本研究では、SPSS ver.19 を用いて統計分析を行った。

4. 調査結果と考察

4.1. ストラテジーの適切度評価と語用論的条件の関連

《依頼》と《改善要求》におけるストラテジーの適切度評価の結果を以下の表に示す。

表1 《依頼》と《改善要求》のストラテジーの適切度評価

	NS		LSA		LSI	
	依頼	改善要求	依頼	改善要求	依頼	改善要求
①	1.91(0.880)	2.52(1.211)	2.10(1.094)	2.58(1.007)	2.12(1.269)	2.47(0.884)
②	2.52(1.247)	3.48(1.314)	3.14(1.332)	3.46(1.420)	2.88(1.409)	2.73(0.772)
③	2.91(1.176)	3.13(1.191)	2.00(1.145)	2.81(1.272)	2.12(0.928)	1.87(0.806)
④	3.78(0.883)	4.13(1.034)	3.79(1.063)	3.62(1.243)	3.41(1.176)	3.20(1.108)
⑤	3.30(0.953)	4.04(1.122)	3.21(1.186)	3.62(0.964)	3.29(1.047)	3.33(1.011)
⑥	4.43(0.825)	3.91(1.100)	3.62(1.298)	3.77(1.219)	3.47(0.800)	3.73(0.998)
⑦	3.52(1.211)	2.96(1.334)	3.24(1.277)	2.38(1.112)	3.35(0.996)	2.33(0.943)
⑧	2.13(1.296)	2.43(1.313)	2.83(1.234)	2.54(1.247)	2.82(1.015)	2.07(1.181)
⑨	3.83(1.340)	3.87(0.991)	3.55(1.162)	3.42(1.149)	3.65(1.169)	2.60(1.200)
平均	3.14	3.38	3.05	3.07	3.01	2.70

※括弧内の数値は標準偏差値である。

以下では、②、⑦、⑧、⑨の「要求内容の実現」ストラテジー群と、①、④、⑤、⑥の「相手への配慮」ストラテジー群、③「主ストラテジー」の3つに大別して考察を進めていく。

4.1.1. 「要求行為の実現」ストラテジー群の適切度評価

②「主+代案提示」と⑦「主+交換条件の提示」には、《依頼》と《改善要求》に差異が見られたが、これは発話機能を区別する語用論的条件による相違であると考えられる。

「代案提示」は、話者が要求内容を満たすような代案を提示するものである。例えば、「一緒に勉強しよう《依①》」は「ノートを借りたい」という要求を満たす。しかし、これは《依頼》の語用論的条件(5)による「話者は相手から利益を受ける」という客観的状況を曖昧にするため、要求を行う自らの負担を軽くしようとする話者の利己的な行為であると捉えられかねない。《改善要求》ではそのような状況は存在しないため、「あそこにラウンジあるよ《改要①》」のような代案の提示は、純粹に相手の負担を減らすストラテジーとして《依頼》よりも適切度は高く評価されたと考えられる。

「交換条件の提示」は、話者が要求内容と対価の交換条件を提示するものである。《依頼》において第一発話での「ごはんをごちそうするから《依②》」のような交換条件の提示は、話者が対価を支払うという約束になり、相手の《協力》にも効果的に働く可能性がある。しかし、《改善要求》では語用論的条件(5)により、話者は相手に不満の感情を抱いている。故に、「電話してもいいけど《改要①》」のような発話は、かえって「電話をしな

いでほしい」という話者の本音を明確にしてしまう。また、要求内容の実現が絶対的な条件となり、相手に心理的な負担を与えることから適切度評価は低くなったと考えられる。

⑧「主+追加の情報提供」は、《依頼》と《改善要求》ともに低い適切度評価であったが、⑨「事情の説明+主」はどちらも高い評価であった。これは、共通の語用論的条件 (3) 「参与者 B による当該行為の実行は参与者 B 自身の権限に基づく。」によると考えられる。山岡 (2008 : 84) はこれを「任意性」と呼んでいるが、要求内容の実現には相手はその必然性を理解し、要求を受け入れるのに十分な情報の提供が必要となる。

「追加の情報提供」は「この頃忘れ物が多いんだ《依②》」や「今、難しい問題解いているんだ《改要①》」など、要求の背景に関する付随的な情報である。このような表現は間接的に要求の必然性を主張するものであるが、情報を得た相手によっては「わがまま」や「嫌味」と受け取られる可能性があるため、適切度は低いと評価されたと考えられる。

一方で、「事情の説明」は、「財布を取りに帰らないといけないから《依頼②》」や「勉強しているから《改要①》」など、要求の背景事情やその必然性を直接的に伝えるものである。熊井 (1992a) は、このような情報提供は相手との共通基盤を作り、行為要求に対する心の準備をさせる効果もあるという。熊井 (1992b)、楊 (2004) でも行為要求に先立って用いられる例が多く、適切度評価と一致する。「事情の説明」によって行為要求の妥当性を示すことは適切であり、要求内容の実現には有効であると話者は認識していると言える。

4.1.2. 「相手への配慮」ストラテジー群の適切度評価

①「主+相手の気持ちの代弁」は《依頼》と《改善要求》ともに適切度評価は低かった。これは相手が行為要求を負担に思う気持ちを話者が代弁するものである。例えば、「貸すのはいやかもしれないけど《依①》」は相手が「ノートを貸す」という要求に対して負担に思う気持ちを代弁する。しかし、主ストラテジーによって既に行為要求を表明した上で、それが負担になることを相手の立場で代弁することは、発話全体に矛盾を生じさせ、相手に不信感を抱かせる可能性がある。故に、適切度評価は低くなったと考えられる。

④「要求の予告+主」、⑤「要求度の軽減+主」、⑥「詫び+主」はいずれも適切度評価が高かった。これは共通の語用論的条件 (3) 「参与者 B による当該行為の実行は参与者 B 自身の権限に基づく。」の「任意性」に配慮した結果であると考えられる。

「要求の予告」は、「お願いがあるんだけど《依頼》」や「悪いんだけど《改要》」のように主ストラテジーの前置きとして行為要求を予告するものである。柏崎 (1992) においても要求場面での使用頻度は高い。要求内容の実現は相手の任意であり、話者は行為要求を受け入れてもらうために十分な配慮を示す必要がある。前置きとしての「要求の予告」は、要求場面における最低限の相手への配慮として、適切度は高く評価されたと考えられる。

「要求度の軽減」は、程度を下げる副詞によって要求度を下げるものである。山岡 (2008 : 93) は、「《改善要求》は相手に対する不満を表明する効果もあるため《依頼》以

上に相手に負担をかける恐れがある」という。本調査の「できれば《改要》」という表現は相手への圧力を緩和し¹³、相手の負担を極力減らそうとするものである。その短く簡単な表現も相まって、《改善要求》では《依頼》以上に適切度が高く評価されたと考えられる。

「詫び」は、謝罪の言葉によって相手に恐縮の意を表すものである。熊谷（1995）によると、不当な強制をされたという不快感を相手に与えないようにするために用いられるのが「詫び」である。簡単な言葉で使いやすく、謝罪としての意味に加えて、相手の注意を喚起して話の場を作ることも可能であり、話者にとっては利便性の高いストラテジーであることから、高い適切度評価につながったと考えられる。

4.1.3. 主ストラテジーの適切度評価

③「主」は、《依頼》と《改善要求》ともに適切度評価は低かった。しかし、①「主+相手の気持ちの代弁」、⑦「主+交換条件の提示」、⑧「主+追加の情報提供」はさらに評価が低いことから、主ストラテジー単独発話には一定の許容範囲があると言える。《依頼》と《改善要求》の範囲は異なるが、これは語用論的条件によって説明することができる。

山岡（2008：92）は、「《依頼》は利害ゼロの状態からプラスの利害（利益）を得ようとするものであり、《改善要求》はマイナスの利害（不利益）の状態をゼロに戻そうとするものである」と述べている。《依頼》の場合、利益を得るために話者は相手に対する配慮にも慎重になり、より適切な発話を構成しようとするためにストラテジーの適切度評価も厳しくなる傾向があると考えられる。これは実際に、《依頼》の適切度評価の平均値が《改善要求》よりも低いことから分かる。一方で、《改善要求》では、相手の与害行為によるマイナスの状態とそれを中断するという目的によって、《依頼》ほど相手に気を使う必要がないため、主ストラテジー単独の発話に対する許容度も高くなったと考えられる。

4.2. 母語話者と学習者の適切度評価の差異

本節では、母語話者（以下、NS）と上級（以下、LSA）、中級学習者（以下、LSI）の適切度評価の差異について、個々のストラテジーについて一元配置分散分析と多重比較を行った結果を示し、3グループ間に生じた有意差について述べる。

4.2.1. 《依頼》における適切度評価の差異

「主ストラテジー」にはNSとLSAに有意差、NSとLSIに有意傾向が示された¹⁴。学習者間で有意差は示されなかったことから母語話者と非母語話者の差異であると言える。

¹³ 山岡・牧原・小野（2010：146）は、「もしよかったら」という《依頼》の前置表現を、「《依頼》に応じて《協力》しなくてはならないと相手を感じる心理的圧力を軽減しようとする表現」と述べている。「できれば」は、これと同様の効果を持つと考えられる。

¹⁴ 「詫び」にも「主」と同様の有意差が生じていたが、LSA、LSIともに適切度評価はNS同様に高いことから、この有意差は全体的な評価得点の低さによって生じたものと考えられる。

要求場面におけるストラテジーの適切度評価
—依頼、改善要求の比較—

表2 《依頼》における3グループの評価得点の多重比較 (Tukey法)

発話文	多重比較	1 NS	2 LSA	3 LSI	F値
③主	1>2, 1>3	2.91	2.00	2.12	4.636*

$p^{\dagger} < .10$, $*p < .05$, $**p < .01$

③「主」は、学習者の適切度評価が低い。学習者には事前質問として「日本人とのコミュニケーションで、どのようなことに気をつけているか。」という項目を設けたが、「丁寧さ」や「適切さ」といった回答が多く見られた。〈命令〉系の主ストラテジー単独の発話は、このような学習者にとって配慮の欠けた非常に不適切なものと判断されたと考えられる。

4.2.2. 《改善要求》における適切度評価の差異

「主ストラテジー」にはNSとLSI、LSAとLSIに有意差が生じていた。「事情の説明」にはNSとLSIには有意差、LSAとLSIには有意傾向が認められた。いずれも学習段階による差異が生じているが、学習段階が上がるにつれてNSの適切度評価に近づいていた。

表3 《改善要求》における3グループの評価得点の多重比較 (Tukey法)

発話文	多重比較	1 NS	2 LSA	3 LSI	F値
③主	1>3, 2>3	3.13	2.81	1.87	5.414**
⑨事情の説明	1>3, 2>3	3.87	3.42	2.6	5.700**

$p^{\dagger} < .10$, $*p < .05$, $**p < .01$

③「主」については、《依頼》同様に学習者の評価は低かった。《改善要求》における主ストラテジー単独発話の許容度については4.1.3で述べたとおりである。しかし、配慮の欠けた表現は、相手への不満の感情を直接的に伝えてしまう可能性があり、学習者にとって接触場面では非常に不適切であるという意識が強いことが分かる。

⑨「事情の説明+主」は、LSIの適切度評価が低かった。しかし、初鹿野・熊取谷・藤森(1996)によると、「事情の説明」の使用割合は学習者のほうが高いが、ストラテジーの組み合わせのバリエーションが母語話者より豊富であるという。つまり、「事情の説明」自体の適切度は母語話者と同じ評価であっても、「事情の説明+主」という型に対する評価が分散化したために低い適切度評価につながった可能性が考えられる。

5. おわりに

本稿では、《依頼》と《改善要求》における個々のストラテジーについて、話者の適切度評価を分析し、語用論的条件の観点から考察することで、要求場面において適切度の高

いもの¹⁵、発話機能によって適切度の異なるものを明らかにすることができた。また、母語話者と中級、上級学習者の適切度評価で有意差が生じたストラテジーを示し、その原因を考察することで、母語話者と学習者の認識の違いを明らかにすることができた。

発話機能と個々のストラテジーの適切度の関連性を示すことは、学習者が日本社会での円滑なコミュニケーションを目指す上で一つの指標になると考える。しかし、適切度評価は個別性が高いため、その評価要因を明確に定義することは難しい。データ数を増やし、アンケート調査に加えてインタビューなどで話者の評価を客観視すること、その他の分析の観点を加えることなどを今後の課題とし、より精度の高い指標を提示したいと思う。

注記：本稿は2014年1月に提出した修士論文を加筆修正したものである。

参考文献

- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析-依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79号、pp.53-63
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』大修館書店
- 熊井浩子 (1992a) 「外国人の待遇行動の分析 (1) —依頼行動を中心に—」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会学篇』28巻1号、pp.1-44
- 熊井浩子 (1992b) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11巻13号、pp.72-80
- 熊谷智子 (1995) 「依頼の仕方—国研岡崎調査のデータから—」『日本語学』14巻10号、pp.22-32.
- 初鹿野阿れ、熊取谷哲夫、藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向：日本語母語話者と日本語学習者の比較」『日本語教育』88号、pp.128-39
- 牧原功 (2008) 「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』7、pp.51-60
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現——日本語語用論入門』明治書院
- 楊雪丹 (2004) 「依頼のストラテジーの中日対照」『日本語教育と異文化理解』3、pp.61-69

(にし ゆかり 言語社会研究科修士課程修了生)

¹⁵ 個々のストラテジーの機能に対応する表現形式は本稿の調査文の限りではないが、《依頼》と《改善要求》に共通して評価の高かった④⑤⑥⑨については、表現形式によらず、その補助ストラテジーの機能自体が要求場面において適切度が高いものであると考える。

要求場面におけるストラテジーの適切度評価
 —依頼、改善要求の比較—

資料 アンケート調査用紙

_____には①～⑨のことばがはいります。①～⑨を読んで、[5-4-3-2-1]に○をつけてください。

依頼①
 *背景: あなたは今日の朝、起きることができなくて授業を休んでしまいました。明日はテストがあります。
 *場面: 同じ授業に出ている仲がいい友だちにノートを借ります。あなた:「あのさー、_____。」

	〈よい—————よくない〉
①「ノート貸して。貸すのはいやかもしれないけど。」	5---4---3---2---1
②「ノート貸して。いっしょに勉強しよう。」	5---4---3---2---1
③「ノート貸して。」	5---4---3---2---1
④「おねがいがあるんだけど、ノート貸して。」	5---4---3---2---1
⑤「ちょっとだけ、ノート貸して。」	5---4---3---2---1
⑥「ごめん、ノート貸して。」	5---4---3---2---1
⑦「ノート貸して。今度なにかお礼するから。」	5---4---3---2---1
⑧「ノート貸して。このごろテストの勉強がんばっているんだ。」	5---4---3---2---1
⑨「今日の授業、休んじゃったから、ノート貸して。」	5---4---3---2---1

依頼②
 背景: あなたは仲がいい友だちに、「授業がおわったら、ひるごはんに行こう。」と言いました。
 しかし、あなたは財布を忘れたことに気がついて、家に帰ります。
 場面: 友だちには30分くらい待ってもらうように頼みます。あなた:「あのさー、_____。」

	〈よい—————よくない〉
①「30分くらい待っていて。30分も待つのは、いやかもしれないけど。」	5---4---3---2---1
②「30分くらい待っていて。どこかで時間をつぶしていいよ。」	5---4---3---2---1
③「30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1
④「おねがいがあるんだけど、30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1
⑤「できれば、30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1
⑥「ごめん、30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1
⑦「ごはんをごちそうするから、30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1
⑧「30分くらい待っていて。このごろ、忘れものが多いんだ。」	5---4---3---2---1
⑨「財布を取りに帰らないといけなから、30分くらい待っていて。」	5---4---3---2---1

改善要求①
 背景: 仲がいい友だちといっしょに勉強しています。しかし友だちは大きな声で電話しています。
 場面: あなたは静かにするように言います。あなた:「あのさー、_____。」

	〈よい—————よくない〉
①「もうすこし静かにして。話したいかもしれないけど。」	5---4---3---2---1
②「もうすこし静かにして。あそこにはラウンジあるよ。」	5---4---3---2---1
③「もうすこし静かにして。」	5---4---3---2---1
④「悪いんだけど、もうすこし静かにして。」	5---4---3---2---1
⑤「できれば、もうすこし静かにして。」	5---4---3---2---1
⑥「ごめん、もうすこし静かにして。」	5---4---3---2---1
⑦「もうすこし静かにして。電話してもいいけど。」	5---4---3---2---1
⑧「もうすこし静かにして。今、難しい問題を解いているんだ。」	5---4---3---2---1
⑨「勉強しているから、もうすこし静かにして。」	5---4---3---2---1

改善要求②	
背景: あなたは仲がいい友だちに本を貸しました。 しかし、友だちは荷物をたくさん持っているので、その本を床に置きました。	
場面: あなたは、友だちに本を床に置かないように言います。あなた:「あのさー、_____。」	
	〈よい—————よくない〉
①「そんなところに置かないで。重いかもしれないけど。」	5---4---3---2---1
②「そんなところに置かないで。私がほかの荷物を持つとか?」	5---4---3---2---1
③「そんなところに置かないで。」	5---4---3---2---1
④「悪いんだけど、そんなところに置かないで。」	5---4---3---2---1
⑤「できれば、そんなところに置かないで。」	5---4---3---2---1
⑥「ごめん、そんなところに置かないで。」	5---4---3---2---1
⑦「そんなところに置かないで。本を貸すのはいいけど。」	5---4---3---2---1
⑧「そんなところに置かないで。その本、5000円だったんだ。」	5---4---3---2---1
⑨「大事な本だから、そんなところに置かないで。」	5---4---3---2---1